

小泉八雲・作 耳無芳一の話 より抜粋

日が暮れてから、住職と納所とは出て行った、芳一は言いつけられた通り縁側に座を占めた。自分の傍の板舗の上に琵琶を置き、入禅の姿勢をとり、じっと静かにしていた——注意して咳もせかず、聞えるようには息もせず。幾時間もこうして待っていた。

すると道路の方から跽音のやって来るのが聞えた。跽音は門を通り過ぎ、庭を横断り、縁側に近寄って止った——すぐ芳一の正面に。

『芳一！』と底力のある声が呼んだ。が盲人は息を凝らして、動かずに坐っていた。

『芳一！』と再び恐ろしい声が呼ばわった。ついで三度——兇猛な声で——

『芳一』

芳一は石のように静かにしていた——すると苦情を云うような声で——

『返事がない！——これはいかん！……奴、どこに居るのか見てやらなければア』……

縁側に上る重もくるしい聲音がした。足はしずしずと近寄って——芳一の傍に止った。それからしばらくの間——その間、芳一は全身が胸の鼓動するにつれて震えるのを感じた——まったく森閑としてしまった。

遂に自分のすぐ傍であららしい声がこう云い出した——『ここに琵琶がある、だが、琵琶師と云つては——ただその耳が二つあるばかりだ！……道理で返事をしないはずだ、返事をする口がないのだ——両耳の外、琵琶師の身体は何も残っていない……よし殿様へこの耳を持って行こう——出来る限り殿様の仰せられた通りにした証拠に……』

その瞬時に芳一は鉄のような指で両耳を掴まれ、引きちぎられたのを感じた！ 痛さは非常であつたが、それでも声はあげなかつた。重もくるしい足踏みは縁側を通つて退いて行き——庭に下り——道路の方へ通つて行き——消えてしまった。芳一は頭の両側から濃い温いものの滴つて来るのを感じた。が、

あえて両手を上げる事もしなかった……

日の出前に住職は帰って来た。急いですぐに裏の縁側の処へ行くと、何んだかねばねばしたものを踏みつけて滑り、そして慄然として声をあげた——それは提灯の光りで、そのねばねばしたものの血であった事を見たからである。しかし、芳一は入禅の姿勢でそこに坐っているのを住職は認めた——傷からはなおお血をだらだら流して。

『可哀そうに芳一！』と驚いた住職は声を立てた——『これはどうした事か……お前、怪我をしたのか』
……

住職の声を聞いて盲人は安心した。芳一は急に泣き出した。そして、涙ながらにその夜の事件を物語った。『可哀そうに、可哀そうに芳一！』と住職は叫んだ——『みな私の手落ちだ！——酷い私の手落ちだ！……お前の身体中くまなく経文を書いたに——耳だけが残っていた！そこへ経文を書く事は納所

に任したのだ。ところで納所が相違なくそれを書いたか、それを確かめておかなかったのは、じゅうじゅう私が悪るかった！……いや、どうもそれはもう致し方のない事だ——出来るだけ早く、その傷を治すより仕方がない……芳一、まア喜べ！——危険は今まったく済んだ。もう二度とあんな来客に煩わされる事はない』

深切な医者のおかげで、芳一の怪我はほどなく治った。この不思議な事件の話は諸方に広がり、たちまち芳一は有名になった。貴い人々が大勢赤間ヶ関に行つて、芳一の吟誦を聞いた。そして芳一は多額の金員を贈り物に貰つた——それで芳一は金持ちになった……しかしこの事件のあつた時から、この男は耳無芳一という呼び名ばかりで知られていた。

第 18 回 青空文庫朗読コンテスト 課題
小泉八雲・作「耳無芳一の話」より抜粋

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（訓練者一回）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。